在宅介護を継続している介護者(嫁)の主観的負担感と成就感

渡　辺　千枝子
Chieko WATANABE

要　旨

介護に関する研究の多くは「介護負担」を焦点にあてたものが多かったが、介護の継続という視点から肯定的な見方の必要性が指摘されるようになった。本研究は、在宅における介護の継続を可能にするために、介護する嫁の主観的介護負担感と成就感を明らかにすることを目的として、M市近郊の介護を行う嫁110名に自記式によるアンケート調査を行った。その結果、5割以上の嫁は、主観的健康感が悪いと感じ、約8割が自分の健康が気になると答えている。また、5割近くの者が、経済的に負担感を感じ、被介護者との関係に不満を感じているなど社会的な負担も感じている。しかしその一方で、「舅、姑を最期までみたい」「舅、姑の介護を前向きに考えたい」等、被介護者に愛着を感じている嫁は9割近くいた。また、介護に対して「他者から励まされることがうれしい」「介護方法を学ぶことができた」「介護する自分の姿は、子どもによい影響を与える」等、報酬として受け止め、介護の継続の需要な要素を含んでいることがわかった。

Ⅰ　はじめに

厚生労働省の平成12年介護サービス世帯調査によれば、主な介護者の続柄をみると、子の配偶者で女性が最も多く27.7%となっている。また、北村の「現代の嫁姑関係」の調査では、姑と同居している女性のうち4人に1人は「うまくいっていない」と回答しており、嫁がもつ介護の負担感はさらに増すものと考えられる。しかし、実際には嫁が長期間の介護を継続できているという事実から、介護は単に負担感だけでなく、ある種の成就感を感じていると考えられる。

介護に関する研究の多くは「介護負担」を焦点にあてていた。しかし、山本、井上らの研究では負担感のみではなく、肯定的な見方の必要性を提示している。介護による負担は、「対人関係や生活上多様な困難が伴い、介護者の生きがい感を阻害するほどにもなりうる。」が井上は「介護の負担として感じられる介護者役割過重と、報酬として感じられる　①学び　②意義　③他の人からの報酬は、独立して存在すると考えられる。」と述べている。そこで、本研究は、嫁を対象として在宅における介護の継続を可能にするために、介護に対する主観的介護負担感と成就感を明らかにすることを目的として調査を行った。

Ⅱ　用語の定義

・介護の負担感：嫁が介護を継続していく中で受ける、「損害を被った」または「大変さや困難を感じた」と感じる主観的で否定的な感情。

・介護の成就感：嫁が介護を行っていく上で、介護の継続によって「報酬」「愛着」等を自覚し、介護することに意義を感じる肯定的で何かを獲得することができたという積極的な感情。

Ⅲ　研究方法

1．対象：N県M市近郊で訪問看護・介護を受ける高齢者を介護する嫁110名
2．方法：自記式によるアンケート調査表。訪問看護及び訪問介護サービスによる訪問時にアンケート用紙を嫁に直接配布、回収は、次回訪問時または郵送とした。
3．内容：A介護者の特性　B被介護者の特性　C嫁という意識　D負担感　E愛着性　F報酬について質問した。
4．調査期間：平成13年12月～平成14年３月
5．分析方法：SPSS　11.0Jで統計処理を行った。
6．倫理的配慮：アンケート用紙配布時に調査の主旨を説明するとともに、調査用紙にも目的を明記した。得られた情報は研究以外の目的で使用しないこと、結果の報告を行うことを伝えた。また、プライバシーに深く関わる回答に、答えたくないという選択肢を設けた。

Ⅳ　結果

アンケート配布総数110、回収数67、回収数67、回収率60.9%、有効回答数64、有効回答率95.5%であった。

1．対象の特性

対象の基本属性は表１に示す。平均年齢は56.4歳(SD7.5)、対象者のうち長男の嫁52名(81.3%)、平均同居期間291.2ヶ月(SD144.8)、平均介護期間58.8ヶ月(SD47.8)、専業主婦20名(31.2%)、介護のために退職した者は16名(25.5%)となっている。また、階層別介護期間および同居期間は表２・表３に示す通りである。対象者のうち、半数以上の者が主観的に健康ではないと答えている。そして、対象者の自覚症状と疾病の状況は表４に示すように、肩こりが最も多く、次いで腰痛、膝関節症、高血圧等となっている。食欲・睡眠・鬱的気分の状態については表５に示ように約半数が気分的に鬱的な状態であることを自覚しており、睡眠、食欲等が何らかの不調を感じていた。

そして、鬱的な気分を感じている者31名中21名は主観的健康感が大変悪いまたは、少し悪いと回答している。

表１　対象の基本属性　　N=64

平均年齢	56.4歳(SD±7.5)
続柄	長男の嫁52(81.3%)
平均同居期間	291.2ヶ月(SD±144.8)
平均介護期間	58.8ヶ月(SD±47.8)
就業	専業主婦　20(31.2%) 介護のため退職(含予定)16(25.0%) 就業27(42.2%)
主観的健康感	大変悪い 3(4.7%) 少し悪い32(50.0%)

表2　介護期間

箇所	人数
1～ 12	12
13～ 24	4
25～ 36	10
37～ 48	5
49～ 60	10
61～ 72	4
73～ 84	4
85～ 96	2
97～108	4
109～120	4
121～132	2
133～144	1
145以上	2
計	64

表3　同居期間

箇所	人数
0～ 60	7
61～120	4
121～180	2
181～240	8
241～300	11
301～360	9
361～420	14
421～480	7
481～540	0
541～600	2
計	64

表4　自覚症状と疾病の状況　名(%)

	重症	中程度	軽度	総数
肩こり	11(17.2)	22(34.4)	15(23.4)	48(75.0)
腰痛	5(7.8)	22(34.4)	20(31.3)	47(73.5)
膝関節症	4(6.3)	10(15.6)	13(20.3)	27(42.2)
高血圧	8(12.5)	11(17.2)	5(7.8)	24(37.5)
自律神経失調症	3(4.7)	5(7.8)	11(17.2)	19(29.7)
胃・十二指腸潰瘍	3(4.7)	3(4.7)	9(14.1)	15(23.5)

表5　食欲・睡眠・気分　名(%)

	悪い状態	少し悪い	普通	良好	総数
食欲	2(3.1)	7(10.9)	49(76.6)	3(4.7)	61(95.3)
睡眠	1(1.6)	20(31.1)	38(59.4)	2(3.1)	61(95.3)
気分(鬱的)	5(7.8)	26(40.6)	29(45.3)	1(1.6)	61(95.3)

2．被介護者の特性

被介護者の属性は、表6に示す。平均年齢86.2歳(SD6.3)平均要介護度3.69、主な疾患は複数回答で、脳血管障害24名、痴呆22名となっている。

表6　被介護者の特性　N=64

平均年齢	86.2歳(SD±6.3)
平均要介護度	3.69(SD±1.46)
疾患	脳血管障害　24(37.5%)
	痴呆　22(34.4%)
	老衰　15(23.4%)
	心疾患　10(15.6%)
意志の疎通	できない10(15.6%)
	多少できる20(31.3%)
	たいていできる21(32.8%)
	できる12(18.8%)

3．嫁という意識

長男の嫁が親の介護を行うべきかという問いに対して、表7に示す通り「非常に思う」と答えたのは長男の嫁52名のうち6名(11.5%)、少し思うというものは、21名(40.4%)で5割以上の長男の嫁が、介護は長男の嫁が行うべきであると考えていることがわかった。そして、長男以外の嫁では、10名中1名が長男の嫁が親の介護を行うべきであると考えていた。同じ質問に対して「あまり思わない」「全く思わない」と答えたものは、長男の嫁18名(34.6%)で長男の嫁以外の10名中9名がいた。また、答えたくないと意思表示した者が長男の嫁の中では3名いた。

表7　長男の嫁が介護を行うべきである　名(%)

	長男以外の嫁	長男以外の嫁	総数
非常に思う	6(11.5)		6(11.5)
少し思う	21(40.4)	1(10.0)	22(50.4)
あまり思わない	12(23.1)	5(50.0)	17(73.1)
全く思わない	6(11.5)	4(40.0)	10(51.5)
答えたくない	3(5.8)		3(5.8)

4．介護の負担感

表8に示すように中谷氏の負担感スケールは12項目の質問で構成されており、質問に対する選択肢は、「非常にそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4つとなっているが、「非常に思う」「少し思う」を「肯定的回答」に、「あまり思わない」、「まったく思わない」を「否定的回答」とした。この中で「お世話の苦労があっても前向きに考えていこうと思う」「ご本人を最期までみてあげたいと思う」は86.0%の者が肯定的に考えている。次いで、「世話をしていると自分の健康が気になる」が78.2%、「お世話で精神的に疲れてしまう」70.3%と心身の負担感を感じている者も多いことがわかった。また、「今後世話が自分の手におえなくなるのではと心配になってしまう」「もし、少しでも代わってくれる親族がいれば代わってほしい」と考えている者が67.2%いた。また、気分が鬱的である者31名中23名(74.2%)の者が、「病院か施設で世話をしてほしい」と考えている。そして「病院か　施設で世話をしてほしい」ことに肯定的な回答をした36名中29名(80.6%)が「少しでも代わってくれる親族がいればかわってほしい」と回答している。

さらに、表9に示すように経済的なことを考えなければ、もっと介護保険サービスを利用したいと答えたものが46.9%で、そして現在の経済状態を不満に思っている者も23.5%いた(表10)。

表8　中谷陽明氏　負担感スケール[1)]　　名(%)　N=64

項目	肯定的回答	否定的回答
お世話は大して重荷ではない	38(59.4)	21(29.9)
趣味・学習・PTA等社会的活動の時間が持てなくて困る	37(57.8)	23(35.7)
お世話で精神的に疲れてしまう	45(70.3)	16(25.0)
お世話の苦労があっても前向きに考えていこうと思う	55(86.0)	5(7.8)
病院か施設で世話してほしいと思うことがある	36(56.3)	24(37.5)
お世話で家事その他のことに手がまわらなくて困る	27(42.2)	33(51.6)
今後世話が自分の手に負えなくなるのではと心配になってしまう	43(67.2)	18(31.1)
ご本人のことで近所に気兼ねする	16(25.0)	45(70.4)
もし、すこしでも代わってくれる親族がいれば代わってほしい	43(67.2)	20(31.3)
お世話で精神的にはもう精一杯である	39(53.8)	24(37.5)
ご本人を最期まで看てあげたいと思う	55(86.0)	6(9.4)
世話をしていると自分の健康が気になる	50(78.2)	12(15.6)

表9　経済的余裕があれば介護保険を受ける　　名(%)

受けたい	230(46.9)
十分である	21(32.8)
わからない	11(17.2)

表10　介護者の社会的側面　　名(%)

	大変不満	少し不満	普通	満足	総数
被介護者との関係	6(9.4)	21(32.8)	30(46.9)	33(4.7)	60(93.8)
家族関係	2(3.1)	13(20.3)	36(56.3)	8(12.5)	59(92.2)
友人・親戚関係	7(10.9)	9(14.1)	38(59.4)	7(10.9)	61(95.3)
経済状況	1(1.6)	14(21.9)	44(68.8)	2(3.1)	61(95.3)
生活への満足	2(3.1)	7(10.9)	26(40.6)	1(1.6)	36(56.2)

5．愛着

被介護者への愛着として、表11に示したように「最期までみたい」「介護することは親孝行である」「舅・姑を守る」「介護をやり通す」「介護を前向きに考える」という項目で質問した。「舅、姑を最期まで在宅でみたい」というもの、「舅、姑を介護することを前向きに考えたい」という回答がそれぞれ86.0%あった。舅・姑を守りたいと考えている73.4%、介護をやり通したい55.7%、介護を行うことが親孝行である45.3%とかなり多くの嫁が舅、姑に対して愛着を感じていると考

えられる。お世話は重荷であると考えている者38名中35名(92.1%)が「最期までみたい」に対して肯定的な回答をしている。また、同様にお世話は重荷である38名中37名(97.4%)の者が介護を前向きに考えていこうと答えている。しかしその一方で4割の嫁が舅・姑との関係を不満に感じていると答えている(表10)。

表11　愛着　　名(%)

	非常に思う	少し思う	あまり思わない	総数
最期までみたい	36(56.3)	19(29.7)	5(7.8)	60(93.8)
前向きに考える	20(31.3)	35(54.7)	5(7.8)	60(93.8)
やり通す	19(29.7)	12(18.8)	23(35.9)	54(84.4)
舅・姑を守る	24(37.5)	23(35.9)	6(9.4)	53(82.8)
親孝行	7(10.9)	22(34.4)	22(34.4)	51(79.7)

6．報酬

介護者への報酬として、表12に示すように「夫からの励ましがうれしい」「夫以外の人の励ましがうれしい」「財産相続で優遇されるべき」「介護の方法」「子供へのよい影響がある」の項目について質問した。回答の選択肢、「非常に思う」「少し思う」を肯定的回答とし、「全く思わない」を否定的回答とすると、肯定的回答の中で最も多かったのは、「夫以外の人の励ましがうれしい」で82.8%であった。しかし、この肯定的回答の中では「非常に思う」を最も多く選択しているのは「夫の励ましがうれしい」で57.8%であった。また、肯定的回答で夫の励ましがうれしい、介護の方法が学べたとそれぞれ76.6%の者が答えている。さらに、自分が親を介護する姿を子どもにみせることは、子どもにとってよい影響があると75.5%が回答している。また、介護をしたものが、財産相続で優遇されるべきであると64.1%が答えている。

表12　報酬　　名(%)

	非常に思う	思わない	あまり思わない	全く思わない	答えたくない	総数
夫の励ましがうれしい	37(57.8)	12(18.8)	3(4.7)	5(7.8)	1(1.6)	58(90.7)
夫以外の人の励ましがうれしい	32(50.0)	21(32.8)	4(6.3)	3(4.7)	1(1.6)	61(95.4)
財産相続で優遇されるべき	29(45.3)	12(18.8)	12(18.8)	4(6.3)	3(4.7)	60(93.2)
介護方法を学べた	24(37.5)	25(39.1)	8(12.5)	0(0)	1(1.6)	57(90.7)
子どもへの良い影響がある	19(29.7)	28(43.8)	9(14.1)	1(1.6)	2(3.1)	59(92.3)

V　考察

1．M市の背景

N県M市は人口約21万人で、65歳以上の高齢者のいる世帯は32.1%で増加傾向にある。N県は農業人口がわが国でも多いとされているが、M市近隣の町村では稲作、りんごやぶどう等の果樹栽培が盛んであり、昔からその土地で生活している人が多い。近年は転勤等によって、他の地域から移動してくる人が増加しているが、地域の活動に参加すると、他から引っ越してきた人を「来たれ者」「昔からいる人じゃないから」と表現する高齢者もみられる。また、訪問看護で訪問した時、イエ意識はまだまだ存在している土地柄であり、介護は嫁が行うことが当然といった考えが根底にあると推測された。

2．介護を行う嫁に対する援助

在宅で、舅・姑の介護を継続している嫁は、身体的不調、憂鬱な気分、経済的な負担を感じ、できれば親族や病院、施設に介護を代わってほしいと願う者が約6割いる一方で、介護を前向きに考え最期まで介護を継続していきたいと考えている者が9割と多いことがわかった。しかも、介護を重荷に感じていると回答した38名のうちの37名の者も介護を前向きに考えていこうと考えている。このことは、介護を負担感のみで捉えることの誤りを示していると考えられる。また、「夫をはじめとする他者からの励ましや介護の方法を学ぶことができた」、「自分の介護を行う姿は子ども達に良い影響を与える」等、報酬を得ることが介護を負担感から成就感に変換するものとして必要なこと、さらには「財産相続では介護を行ったものが優遇されるべきである」という、介護を正当に評価されることの必要性があることが考えられる。

また、鬱的な気分を感じている者の7割近くは主観的健康感が大変悪いまたは、少し悪いと回答しており、嫁全体をみても5割以上の者が「お世話で精神的にはもう精一杯である」と答え、7割の嫁が「お世話で精神的に疲れてしまう」と回答しており、介護を行う嫁に何らかの援助が必要なことを示している。さらに、この結果は嫁にのみ介護を任せることを良しとしているのではないことを意味していると考えられる。嫁が介護を継続するためには、嫁に介護を押し付けるのではなく、介護に成就感を自覚できるような援助を行うことが必要であり、根底にある嫁の複雑な思いにも眼を向け、きれい事だけではない介護の現状をふまえた上で、それでも嫁が前向きに介護を考えていることを認識し、嫁に対しても看護を行って行く必要性があると考えられる。

Ⅵ　結論

1．在宅介護を継続している嫁の5割以上が主観的健康感が悪いと感じ、約8割が自分の健康が気になると考えている。
2．在宅介護を継続している嫁は、鬱的気分では約5割が自覚し、鬱的気分を感じている嫁のうち、7割以上が病院か施設で介護してほしいと感じている。
3．在宅介護を継続している嫁は、被介護者との関係に対して4割以上が不満に感じている。また、経済的に余裕があれば、もっと介護保険サービスを受けたいと4割以上が考えている。
4．在宅介護を継続している嫁の9割近くが「舅、姑を最期まで在宅でみたい」、「舅、姑を介護することを前向きに考えたい」と考えている。
5．介護者への報酬として夫あるいは、それ以外の人の励ましがうれしいと感じている嫁は7割以上である。
6．介護の方法が学べた、自分が親を介護する姿を子どもにみせることは、子どもにとってよい影響があると8割近くの嫁が感じ、また、介護をしたものが、財産相続で優遇されるべきであると6割以上が答えている。
7．在宅介護を継続している長男の嫁の、5割が介護は長男の嫁が行うべきであると考えている。

引用文献

1）中谷陽明,東条光雅：家族介護者の受ける負担,社会老年学,No29 27-36 1989

参考文献

1）北村安樹子：現代の嫁姑関係　株式会社ライフデザイン研究所　1998
2）中井紀代子：家族福祉の課題　筒井書房　2000
3）井上郁：認知障害のある高齢者とその家族介護者の現状,看護研究, 29(3) 17-30 1996
4）山本則子：痴呆老人の家族介護に関する研究,看護研究, 28(4) 67-87 1995
5）吉田千史：家族介護における複雑性と看護研究, Quality Nursing, 6(11) 10-16